

テーマ

開発途上国の初等教育に授業研究を導入するための条件と条件整備

背景

途上国の初等教育の主な問題を簡単に表すと、「就学率の低下・低迷」「中途退学・留年の多さ」「教育内容の不適切・質的問題」の3つである。中でも「教育内容の不適切・質的問題」は、「就学率の低下・低迷」「中途退学・留年の多さ」が解決されるにしたがって明らかになってくる分野で、最も改善が難しいとされる。途上国と同様に初等教育の質の問題に直面しているアメリカで行なわれている、初等教育の質についての研究を参考にする。

研究の内容

教育の質の改善は、学習指導の改善のみを通して行なわれる。

学習指導は、文化に基づいて行なわれる行動である。それを「文化的営み」という。教師は、子供の頃から十数年間学校に通うことによって学習指導はこうあるべきだとも思うようになる。文化的営みは時間経過に対して高度に安定しており、容易に変わるものではない。すなわち学習指導も容易に変わるものではない。文化的営みは長時間にわたる微小変化の積み重ねでしか変化しないということである。また、文化的営みは多くの人に共有されるものであるため、一人では変化させることができないということである。学習指導を改善させるためにはこの点をよく踏まえなければならない。学習指導の改善方法として、授業研究が有効であると考えられる。まず一つに授業研究は長期的・持続的改善を目指すものである。また授業研究は共同的な取り組みである。このことは、文化的営みである学習指導を変化させるために必要な要素を保有しているため、授業研究は学習指導改善に非常に有効である。

参考文献

Lewis, Catherine (2000). "Lesson Study: The Core of Japanese Professional Development," Invited Address to the Special Interest Group on Research in Mathematics Education American Educational Research Association Meetings, New Orleans.

<http://www.lessonresearch.net/area2000.pdf>

Lewis, Catherine. (2002). "Does Lesson Study Have a Future in the United States?" Journal of the Nagoya University Department of Education. Nagoya Journal of Education and Human Development, January 2002, No. 1, 1-23.

<http://www.lessonresearch.net/nagoyalsrev.pdf>

国際協力機構国際協力総合研修所(2000)『日本の教育経験 - 途上国の教育開発を考える - 』

国際協力事業団(2002)『開発課題に対する効果的アプローチ：基礎教育』

(1997)『教育援助にかかる基礎研究 - 基礎教育分野を中心として - 』

橋本吉彦、坪田耕三、池田敏和(2003)『今、なぜ授業研究か』東洋館出版社

二宮皓編(1995)『世界の学校』福村出版

稲垣忠彦、佐藤学(1996)『授業研究入門』岩波書店

ジェームズ・W・スティグラー、ジェームズ・ヒーバート著 湊三郎訳 『日本の算数・
数学教育に学べ 米国が注目する jugyo kenkyuu』教育出版